

くまもと面白漫遊記

～前川広報委員長のおすすめのこの町・この人～

No.24

菊池地区

心と記憶をつなぐ“わいふ”の灯り ～菊池「万華灯」新しい風物詩づくりに込めた思い～

昨年夏、菊池市隈府の中央グラウンドに幻想的な灯り絵が浮かび上がった。

紙コップとローソクで作られた1万個の“わいふの灯り”は手づくりのあたたかい光を放ち、夏の夜の思い出を彩った。

これが菊池「万華灯」。

新しい菊池の風物詩を目ざした市民の灯りは再び、冬を灯しそして、この夏、3万個の浪漫を模る。

菊池「万華灯」は菊池市民の心に灯った夢と希望の灯りでもある。



第2回2003年12月23日 菊池中央グラウンド



第1回2003年8月14日 同

菊池「万華灯」は子供たちの思い出づくり 新しい菊池の風物詩づくりは市民の手で！

昨年の夏、市民の手づくりによる菊池市の新しいイベントが開催された。

その幻想的な灯りの演出“灯り絵”を新聞やTVでご覧になった方も多いただろう。夏の夜の光の祭典といえば、電球を使ったイルミネーションをイメージするのが普通だが、菊池の場合は違っていた。紙コップとローソクなのである。

その数、1万個。菊池市隈府の中央グラウンドに並べられた全長50メートルの折り鶴や花を模った灯り絵は、点火と同時に夏の夜にゆらゆらと浮かび上がり、見事な灯りの演出に人々は魅了されたのである。

菊池「万華灯（まんげとう）」第1回は、こうして市民や観光客の感動と感激をよび、新しい菊池の風物詩にしようという声は広がっていった。

第2回は昨年の12月23日に行われ、「万華灯」の輪はさらなる広がりを見せる。この夏、グレードアップした第3回目が企画立案され、すでにスタッフは動き始めている。

実は、この遊び心がいっぱい、手づくりさが新鮮なイベントを発想、実施したスタッフは、すべて市民有志たち。ボランティアの皆さんで組織された実行委員会で開催されている。今回、話をうかがったのは「万華灯」実行委員会の委員長の山田順一さん（山田写真場経営）と発案された坂本博さん（菊池市商工会主席経営指導員）。2人の言葉からは「万華灯」に込められたふるさと菊池への思いがひしひしと伝わってきた。



山田さん（左）、坂本さん（右）



万華灯



前川委員長

前川委員長 Q：そもそも「万華灯」の発想はどこから？

坂本さん A：実はわが家は「オープンガーデン」（菊池市の十数軒の民家が自慢の庭を開放して見学させる取り組み）をやっていまして、百個くらいのローソクを夜、わが家の庭で灯したのが最初です。
元々、ローソクのあたたかさが好きでしてね。

紙コップは、風よけに利用したんです。
砂を入れて安定をよくしたり、蛍光塗料で色を塗るなどいろいろ考え、山田さん達に見てもらったんです。



2003年12月 ボランティア作業風景

山田さん A：ローソク独特の灯がとても美しい。
これを菊池の夏の風物詩にしようと思いましたが、実施するのは、商工会ではなく、あくまでもボランティアで参加自由にしました。市民の手で風物詩を作りたかったのです。

その理由は、これは「町おこし」ではなく、観光客向けでもない、『子供たちの思い出づくり』のためだからです。

親と子が一緒にローソクに点火して、幻想的な「万華灯」をみんなで作ったという感動を味わってもらいたい。そして、楽しく、素晴らしい思い出にしてもらいたい…。

その気持ちがこのイベントの趣旨なんです。

ですので、手づくりであまり費用をかけない、無理せず楽しんでやりたかったんです。



前川委員長 Q：費用はどのくらいかかりましたか？

坂本さん A：1万個で15万円、その他の費用も含めて20万円程度です。
ローソクさえ変えれば、リサイクルも可能です。

前川委員長 Q：1回目はどのくらいの方が参加されたのですか？

山田さん A：当日の参加者は、地元の方、里帰りした方、観光客を含め380人、ボランティアスタッフが70人。
皆さん、よく頑張ってくれました。

前川委員長 Q：1回目、2回目ともに参加者の皆さんが感動されていましたが、参加者の反応はいかがでしたか？

山田さん A：参加者の方からアンケートには「感動しました。わいふの灯りが広場いっぱい
にゆれた時間、みんなの気持ちが一つになったような気がしました。」「家族の
夏のいい思い出になった。」など頂きました。『万華灯』への想いが通じたこと
を実感しました。

もう一つ、大きな価値は市民ボランティアの皆さんが広がっていったことです。
思わぬところまで広がって、いろんな特技を持ったスタッフが集まったことです。
菊池のこと、ふるさとのことを思う皆さんが大勢いるんだなと勇気付けられました。

坂本さん A：ロータリークラブやライオンズクラブ、
老人会の方などがコップを並べたり、作
ったりしてくれました。



山田さん

『万華灯』へのチャレンジは、「子供たちの思い出づくり」という目的を果たしただけでなく、人材＝個性的なボランティアスタッフが集まるという素晴らしい副産物を生み出した。それは、山田さんたちが目指す「菊池の新しい風物詩」への自信を深めた。そして、その熱い思いが、彼らを次なるステップへと踏み出させる。



坂本さん

この夏、3万個の灯り絵にチャレンジ！ 幻想的な灯り絵が結ぶふるさとへの想い

前川委員長 Q：この夏、今度は3万個の『万華灯』を計画されているとか？

坂本さん A：菊池市の人口が約3万人ですので、3万個の灯りを灯したいという思いを込めました。
幼稚園、小中学校、高校にご協力をいただき、図案や紙コップの制作をお願いしようと思っています。
子供たちが携わると、とてつもない発想が生まれ、いろんなアイデアが出てくるんです。
『万華灯』の作るまでの行程が面白いんです。



スタッフが描いたTシャツのデザイン

前川委員長 Q：3万個の『万華灯』どんなものができのでしょうか？

坂本さん A：立体的に作れないか、考えています。
水が流れる川をイメージ、立体的なアーチ型の橋ができればと思っています。
スタッフは、それぞれ、デザイン班、制作班、資金班などに分かれていて、今、デザイン班が図案を作っているところです。

前川委員長 Q：すごいスケールですね。

山田さん A：今、菊池の中でいろんなイベントが行われています。
菊池では何かが起きようとしているのです。市民が故郷を盛り上げようと、できるだけのことをしようと思っています。

ただ、イベントはイベントだけでしかありません。
重要なことは、長く続けられること。

その一つの例として『万華灯』が足がかりになればと思っています。これでいろんな事が出来るという自信につながればと思います。

『万華灯』は、菊池の人間同士の深まり、仲間意識という大きな成果を生み出しました。菊池市民のふるさとへの想いが高まってきたのです。その意味でも、次なる3万個の『万華灯』はぜひ、成功させたいと思います。

紙コップとローソクで作った簡単な灯りが、こんなにも人の心を熱くするものであろうか。それが1万個、3万個になり、幻想的な素晴らしい絵画となり、感動を与える「灯り」になるのと同じように、沢山の人がその「灯り」に集まってくることで、新たな感動が生まれている。



スタッフが描いたTシャツのデザイン

そこには、チャレンジというキーワードがあるからだろうか。市民の中に「何か菊池のために」という思いが芽生えていることは確かである。観光都市菊池の復活、それを願う市民が肌で感じてきた危機感は今、「ふるさとへの愛」へと進化したのだ。その思いが実を結ぶ日はやがて来るに違いない。

菊池市民の郷土愛のシンボル 万華灯

取材を終えて…前川広報委員長

菊池の風物詩を市民自らの手でつくろうとするボランティアの皆さんの発想と行動力には驚くばかりだ。「子供たちへの思い出づくり」その根底に流れる山田さんや坂本さんたちの世代の誰もが体験した子供の頃の菊池、あの賑わいは私も覚えている。菊池がかつて人にあふれ、その熱気に圧倒された頃の子供たちは、今もワクワクしたあの記憶を持ち続けているのだ。町おこしという大上段に振りかざした大義名分もない。その記憶を今の子供たちに何らかの形で体験させてあげようという、親心もすがすがしい。それが結果的に「町おこし」となってもまた、楽しい。

菊池のことを思う心、郷土愛が大きくとも、どんな風に何をなすべきか、分からない人は多い。そんな中で、身近に出来ることから始めようとする、ちょっと肩の力を抜いた行動が人の心を動かすのかもしれない。山田さんと坂本さんの話をうかがいながら、そう思った。

この夏の『万華灯』の成功を祈ります。

“わいふの灯り” 菊池『万華灯』実施要領（案）抜粋

日時：平成16年8月14日（土）午後7時30分点火予定

（雨天・強風の場合は、15日に順延）

場所：メイン会場 菊池中央グラウンド（菊池神社下の芝生広場）

サブ会場 菊池神社の参道・階段

主催：菊池「万華灯」実行委員会 委員長 山田順一

事務局 菊池市商工会内 担当 坂本

TEL 0968-25-1131

事業内容 紙コップの底にローソクを立て、火をつけ、その灯りと色彩でアートを描きます。個数は3万個。